国立国語研究所学術情報リポジトリ

# Newly adopted words in the 2nd and 3rd versions of "Tetsugaku-Jii"



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-03-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 朱, 京偉, ZHU, Jingwei<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002070 |

『日本語科学』10（2001年10月）80-106　〔研究論文〕

# 『哲学字彙』再版と三版の増補訳語について

朱　京偉
（北京外国語大学）

**キーワード**

語彙史，学術用語，哲学用語，哲学字彙，訳語

**要　旨**

本稿は，『哲学字彙』初版・再版・三版の訳語の性質を明らかにしようとして，初版訳語の調査（1997）に続き，再版と三版の訳語をとりあげて検討したものである。再版については増補訳語の字数別で，また，三版については収録語の急増をもたらした四つの面，つまり，見出し語と訳語の増加，小見出しの増加，注脚付き語の増加，および哲学者人名の増加から，それぞれ検討した。

再版の増補訳語の中で，とくに日中の現代語でともに現存するC類語とD類語に注目するほか，現存する一部の三字語・四字語にも留意すべきであろう。一方，三版の改訂が幅広く行なわれたため，増補訳語も，専門語に偏るものと一般語に偏るものとが混在していて，『哲学字彙』の専門語辞典としての性質を多様化するとともに，曖昧化してしまった。明治末期における三版の位置付けといえば，かつて初版が持っていた先進性が失われ，単なる対訳辞書の一種に過ぎなかったのかもしれない。

## 1．再版における増補訳語の語数

飛田良文(1980)の調査によると，『哲学字彙』は，初版の見出し語（原語）が1952語であるが，再版では771語ほど増補され，見出し語の総数は2723語となった。ただし，これは見出し語の数であって，それぞれの見出し原語に付されている訳語の数ではない。『哲学字彙』の各版では，一原語に対して複数の訳語が備えてあるケースが相当多いので，訳語自身の数は改めて調査する必要がある。本稿は，『哲学字彙』各版の訳語の性質を明らかにしようとして，初版訳語の調査に続き，再版と三版の訳語をとりあげて検討したものである。

『哲学字彙』（再版）の訳語の増補は主として二つの方法によって行われた。一つは，初版にない原語の増加とともに訳語を新たに増加した場合で，もう一つは，初版にすでにあった原語に訳語をさらに追加した場合である[1]。筆者の調査によると，この二種の増補語は合計で1147語となっている。ただし，再版で新しく増補された訳語の数を明らかにするには，それを異なり語に整理する必要があるため，再版の増補語の中から，初版にあった訳語と，再版の重複語を除外しなければならない。除外した語の内訳は次の通りである。

| | |
|---|---|
| 初版に既存の訳語 | 118語 |
| 再版の重複一字語 | 1語 |
| 再版の重複二字語 | 37語 |

再版の重複三字語　　5語
再版の重複四字語　　1語
計125語

したがって，本稿でとりあげる再版の増補語総数は以上の125語を除き，1022語となる。仮に，原語の増加による訳語の増補を「原語増」，訳語の追加による訳語の増補を「訳語増」と略称すれば，再版の増補訳語は次のように分布している。

表１　再版増補訳語の分布及び初版訳語との比較（異なり語）

| | 再版の増補訳語(%) | | | 初版訳語と再版訳語の語数比較 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 原語増 | 訳語増 | 字数別合計 | 初版訳語数 | 増加語数(%) | 再版訳語数 |
| 一字語 | 14 | 2 | 16(1.6) | 29 | +16(35.6) | 45 |
| 二字語 | 596 | 143 | 739(72.3) | 1602 | +739(31.6) | 2341 |
| 三字語 | 148 | 12 | 160(15.6) | 373 | +160(30.0) | 533 |
| 四字語 | 73 | 9 | 82(8.0) | 328 | +82(20.0) | 410 |
| 五字語 | 12 | 0 | 12(1.2) | 87 | +12(12.1) | 99 |
| 六字語 | 4 | 0 | 4(0.4) | 16 | +4(20.0) | 20 |
| 七字語 | 5 | 0 | 5(0.5) | 2 | +5(71.4) | 7 |
| 九字以上 | 4 | 0 | 4(0.4) | 0 | +4(100) | 4 |
| 種類別合計 | 856(83.8) | 166(16.2) | 1022(100) | 2437 | +1022(29.5) | 3459 |

表１によると，原語の増加による訳語の増補は，訳語の追加による訳語の増補を遥かに超えて，増補訳語全体の83.8%を占めていることがわかる。つまり，再版の増補者有賀長雄は，主として見出し原語の増加を通して，数多くの訳語を新たに取り入れたといえる。ただし，「原語増」と「訳語増」の両方を検討してみると，その間では，出典の有無，訳語の新旧，または存廃の確率などの面において，ほとんど差が認められないようなので，本稿では，両方を区別せず，一括に扱うことにした。

また，表１で示したように，再版訳語の中では，増補訳語の総数は1022語で，これは再版の総訳語数3459語の29.5%にあたる[2]。つまり，増補者有賀長雄によって，約３割程度の訳語の増補が行なわれたことがわかった。以下，初版の訳語をとりあげた先行の小論（1997）に倣い，訳語の字数別で，再版の増補訳語の性質をまとめてみよう。

## ２．再版における二字訳語の分類と検討

表１でわかるように，再版では二字訳語の増補が最も多く，増補訳語全体の７割以上を占めている。この中には，新造語がどのぐらいあるか，それに，現代日本語または現代中国語に受け継がれているものがどのぐらいあるかは，筆者にとって最も関心を寄せるところである。ここでは，初版の二字訳語と同じような分類法を用いて，再版で増補された二字訳語を次のように類別しておく[3]。

### A．漢籍に典拠があり，日・中の現代語ではともに死語になった語

この部類に入れた語は，いずれも『漢語大詞典』（羅竹風）または『大漢和辞典』（諸橋轍次）によって古い漢籍の出典が確認されたものである。現代語で死語となったかどうかの基準として，現代語の小中型国語辞典における収録状況によって判断をした。選定した辞典に収録されていない場合は，現代語でほとんど使われないものとみなして，死語として扱ったのである[4]。A類に入れた114語の中，その主なものを示すと次のようになる。（例示の語は語頭字の五十音順に掲げる。以下同）

暗練　遺賜　依信　隠淪　淫惑　鋭志　偃蹇　憶度　加添　愧恧　愧赧　懐怨　介然　恢張
関預　勧諫　含忍　規諫　急卒　郷士　驕肆　兢悚　矜伐　軽罪　堅執　原約　誤錯　公直
抗強　劫波　講議　興敗　荒毀　梟司　拷掠　効績　合礼　告罪　細点　失志　侈靡　自禁
笑言　澆季　詳玩　詳審　贖典　尋究　推尊　成法　姓族　精敏　潜然　禅定　俗漓　大覚
代贖　脱籍　治釐　逐窘　超卓　通塞　禎祥　定産　定体　天鬼　典吏　土蕃　内附　廃壊
廃残　白嘲　反言　煩促　否泰　符券　附従　布揚　賦斂　分殊　放釈　飽足　萌兆　謀図
無累　迷誤　幽袁　容任　約制　令票

### B．漢籍に典拠があり，日・中の現代語において，一方では消滅し，一方ではまだ現存する語

初版のこの部類の語を見れば，現代日本語では使われず，現代中国語ではまだ生き続けている語のほうが圧倒的に多かったが，再版の増補訳語では，中日語双方の存廃はほぼ変わらない語数となっている。これについては，再版の増補を担当した有賀長雄が意識的に当時の日本語の常用語を取り入れたというよりも，増補にあたって，有賀長雄が初版の主編者井上哲次郎と異なった資料・辞書類に依拠したという可能性があると思われる。例えば，日本語になじまない言葉の多い英華字典に依拠したのではなく，日本人が編集した英和辞典類を多用したなどと想到される。まず，日本語で消滅し，中国語でまだ現存する語であるが，全63語の中から次の用例を掲げる。

委頓　応当　会盟　革除　学堂　結案　関鍵　諫諍　虚浮　驕傲　苦楚　孤子　公心　拘牽
控告　梗阻　合宜　做成　惨痛　刪改　讃語　旨意　自恃　奢靡　手稿　聚落　柔和　循例
準許　訟師　彰明　情由　伸冤　神通　進益　成例　斉整　斉備　清醒　税則　尖利　遷徙
相貌　忠順　奠酒　伝布　寧願　年暦　廃馳　不容　簿冊　幽微　庸俗　離析　歪斜

一方，中国語で使われなくなり，日本語でまだ現存する語は70語ほどあって，その主なものは次の通りである。

違例　温雅　家臣　堪忍　鑑識　元祖　教戒　教頭　禁戒　空位　勲功　係累　継起　結縁
古格　固結　故殺　些少　才藻　再起　市会　資性　寂滅　殉死　順礼　初発　所感　詳説
常道　心界　神官　仁心　制欲　精気　先祖　先約　相殺　尊者　丹誠　断食　中位　勅令
沈鬱　天眼　討尋　覇気　半開　部族　平気　屏居　別居　忘恩　邦土　放免　冥府　厄難
雄篇　幼者　要約　抑圧　乱心　礼式

この中で，例えば，「結縁・再起・初発・所感・詳説・先約・半開・忘恩」などのように，中日間における単語の認定の違いによって中国語の辞書に登録されてはいないものの，筆者の内省に

よれば，中国語で実際に使われそうな語も含まれている。また，「教頭・市会・相殺・別居」のように，日本語独自の意味変化を遂げ，現代日本語に生まれ変わったものも見られる。

これらの語の存廃に関して，なぜ中日間に差が生じたかは難しい質問である。それぞれの語の使い道，漢字の難易などと関連するであろうが，基本的には，近代語から現代語への転換ができたものが残り，転換できなかったものが死語となったということがいえる。

### C．漢籍に典拠があり，日・中の現代語ではともに現存する語

前項のB類語との関係から考えると，C類に属する語は，中日両方においてともに現代語への転換をうまく乗り越えたものといえる。初版では，このC類語は数が最も多く，全体の4割弱を占める結果となっているが，再版の増補訳語を調べても，C類語の割合は初版とほとんど変わらず，増補語全体の4割ほどを占めている。C類語298語の中から次の諸語（全体の約7割に相当）を例示する。

哀憐　圧制　行脚　威厳　意向　隠語　運動　嬰児　鋭気　援引　閲歴　演算　音調　過言
家族　家長　課業　解除　解答　学業　学生　学徒　活計　関渉　監禁　勧誘　寛大　寛容
含意　頑固　願望　気質　危急　貴族　記録　寄生　希望　詭計　帰順　共有　教訓　教主
教養　行政　勤王　勤労　禁欲　景色　解脱　形象　系統　刑罰　経由　激憤　傑作　原告
故意　狐疑　口碑　公法　高尚　後裔　講演　考究　功労　交換　購買　合同　強盗　国境
混合　婚約　裁定　再説　最近　参議　私法　私有　支柱　思索　事業　事変　辞職　自主
自乗　自信　自足　地主　失神　実行　写本　釈放　宗派　修飾　修理　収納　熟練　所有
承諾　条約　進行　親切　親族　人事　人生　睡眠　推理　世襲　世俗　成熟　静止　制裁
誠実　整理　責任　節倹　接続　設置　宣告　宣伝　先輩　前進　前兆　疎漏　祖師　阻隔
訴訟　争論　捜査　創見　創始　総数　荘重　卒業　尊重　体力　堆積　代言　代償　代表
知覚　地獄　地租　地方　注解　沈黙　通俗　通路　鄭重　適用　哲人　伝播　伝記　度数
奴隷　透徹　討論　特殊　徳性　内閣　肉欲　認定　破損　賠償　罰金　犯罪　販売　被告
必然　表記　布告　扶助　文献　分析　平民　勉強　保持　保証　抛棄　萌芽　妨碍　妄言
報告　法制　発作　本職　翻訳　無言　明察　盟約　妄想　遊牧　予想　予知　予定　養子
濫用　履行　立案　立法　良民　累積　例外　歴史　論説

この中には，中日現代語の間で意味用法のずれが存するものも一部含まれている。しかし，訳語になったきっかけで古典語の意味が完全に消え，現代語の意味に生まれ変わったようなものがあれば別類扱いにすべきであろうが，その程度に及ばない大多数の語については，語源優先的に考えると，C類語に入れるのが普通であろう。

### D．漢籍に典拠がなく，日・中の現代語ではともに現存する語

D類語は，前項のC類語とともに，いわゆる中日同形語と呼ばれる部類に属するものであるが，漢籍出典の有無という点でC類語と区別している。D類語の語源を考えれば，古い漢籍で出典が見付らないことから，洋学伝来の17世紀以後に現れた近代の新語との可能性が高い。ただし，現

在では，これらの語の出自に関して，在華宣教師の漢訳洋書や英華字典類，または幕末の蘭学訳書や英和辞典類，及び明治以後の著訳書のいずれに求められるのかは未だに不明なものが多く，語誌的調査の結果を待ってはじめて中国製か日本製かとの判別が明らかになるのである。再版の増補訳語のうち，次の43語はＤ類語の部類に入れた。

過程　慣例　議案　協会　教会　極端　空疎　血統　健康　公認　合法　公有　国会　婚期
財政　使徒　自伝　実現　失敗　社員　商会　殖民　人権　星雲　制約　占領　相互　挿入
体系　対比　断案　中性　聴覚　徴候　特権　陪審　符号　複数　誘因　領地　領有　恋情
論文

**Ｅ．典拠不明で，日・中の現代語ではともに廃語となった語**

この種の語は，古い漢籍に典拠がない点においてＤ類語と共通するが，現代語の辞典に収録されず廃語となった点でまたＤ類語と区別している。全123語に及ぶＥ類語の中から次の例を掲げる。

暗嘲　引笑　陰状　開期　壊損　外律　覚官　寛許　関属　喚諾　譏辞　救主　虚傲　驚感
教系　系図　敬拝　顕質　元質　拘冗　豪剛　極期　困迷　差過　支券　私犯　釈館　守産
呪符　襲産　熟考　訟案　譲状　身位　姓称　聖詩　摂動　先有　潜質　遷入　体欲　貸料
脱罪　団簇　馳暢　中律　倒乱　党主　同統　特関　認免　能感　犯例　比考　浮象　封産
並等　偏性　保認　法鎖　傍在　民会　名権　妄用　約因　予望　陽状　流義　留嗣　類属
浪用　惑視

**Ｆ．漢籍に典拠がなく，日・中の現代語において，一方では消滅し，一方ではまだ現存する語**

初版の訳語には，この種の語がほとんど見られなかったが，再版の増補訳語では少数ながらもその存在を無視できないので，ここでＦ類語として扱う。存廃のあり方からみれば，前述のＢ類語に相当する部類であるが，古い出典を持たない点においては，Ｂ類語と異なっている。これらの語は，その出自を考えれば，おそらく近代以後使われだした新語であろうが，中国製か日本製かを明言するには，実例による証明が必要となる。中でも，現代中国語では使われず，現代日本語ではまだ生き続けているもののほうが24語ほど見られ，圧倒的に多数を占めている。

会社　株主　官許　議長　検案　語釈　公知　雑婚　所要　序詞　上院　新設　政略　族制
適法　等親　同格　特免　涜神　背教　腐乱　物界　未熟　要因

これに対して，現代日本語では使われず，現代中国語ではまだ生き続けている語は，「依法・界説・簡短・侵襲」の４語だけにとどまっている。

以上，再版増補訳語の中の二字訳語について，Ａ類～Ｆ類に分類して見てきた。各種語の語数及び初版同類語との対照が見やすいように，表２の形でまとめてみた。

初版の二字語と再版増補の二字語との対照においてとくに注目を引くのは，「典拠あり」語と「典拠なし」語の張り合い関係である。初版の二字語では，「典拠あり」語（Ａ＋Ｂ＋Ｃ）が計1314語で，全体の82％を占め，「典拠なし」語（Ｄ＋Ｅ＋Ｆ）が計288語で，全体の18％を占めているのに対し，再版の増補二字語を見ると，「典拠あり」語が計545語で，全体の73.7％を占め，「典拠な

し」語が計194語で，26.3%を占めている。これによって，初版の「典拠あり」語が多用される傾向に比べ，再版の増補訳語では，「典拠なし」語が比較的多く用いられていることがわかる。

表２　再版で増補された二字訳語の分類及び初版同類語との対照

| 漢籍の典拠 | 分類 | 所属語の性質 | 初版語数(%) | 再版増補語数(%) |
|---|---|---|---|---|
| 典拠あり | A | 中日ともに死語 | 362(22.6) | 114(15.4) |
| | B | 中存・日廃 | 302(18.9) | 63(8.5) |
| | | 日存・中廃 | 33(2.0) | 70(9.5) |
| | C | 中日同形語 | 617(38.5) | 298(40.3) |
| 典拠なし | D | 中日同形語 | 127(7.9) | 43(5.8) |
| | E | 中日ともに廃語 | 161(10.1) | 123(16.7) |
| | F | 中存・日廃 | —— | 4(0.5) |
| | | 日存・中廃 | —— | 24(3.3) |
| 合　計 | | | 1602(100) | 739(100) |

＊表中の「初版語数」は，朱京偉(1997)の表２を参照のこと。

ただし，「典拠なし」語の中で，中日現代語に現存するＤ類語の占める比率を比較してみると，初版のほうが7.9%で，再版の5.8%を上回っているのとは反対に，廃語となったＥ類語を見ると，再版増補語で廃語となった比率が初版のそれを上回っている結果が出ている。つまり，再版の増補にあたって，増補者が近代以後の新語や自らの造語を比較的多く使用したにもかかわらず，廃語（Ｅ類語）になったものが初版以上に多く，中日の現代語に影響を与えたもの（Ｄ類語）が比較的少ないということがいえる。

この結果は，再版の増補二字語だけに限らず，他の増補訳語にも適用できると思われる。

## ３．再版における二字訳語以外の増補語

再版で増補された二字訳語は圧倒的に多く，増補語全体の72.3%を占めている。すると，二字以外の増補訳語は，合わせて27.7%を占めることになる。表1で示したように，増補語数の多い順に，三字語（160語，15.6%）・四字語（82語，8.0%）・一字語（16語，1.6%）・五字語（12語，1.2%）などの順となっている。

再版の二字以外の増補語を初版の同類語と比較してみると，例えば，注目すべき新語や語構成などの面において，とくに検討に値する点が少ないかもしれない。しかし，二字語には専門語以外の一般語が多く含まれているのに対し，二字語以外の訳語となれば，字数が増えるにつれ，専門語的性格がますます強まっていく傾向が顕著に見られる。したがって，再版の増補訳語を検討するにあたって，これらの三字語以上の専門語についても整理してみる必要があると思う。次に，二字訳語以外の増補語を字数別に見ていく[5]。

### 3.1．再版の三字訳語

三字訳語の語構成上の特徴といえば，二字漢語の前後に一字の接尾辞または接頭辞を添えて，

□□＋□パターンまたは□＋□□パターンの語が造られていることがまず挙げられる。この点に関しては，初版の三字訳語も再版の三字訳語も例外ではない。再版で増補された三字訳語160語の中で，接尾辞または接頭辞の付いたものは98語ほどあって，三字増補語の６割を占めている。

□□＋□パターンのもの

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ～的（14語） | 仮形的 | 可耕的 | 教会的 | 合味的 | 匠気的 | 如字的 | 秘教的 | 返報的 | 傍系的 |
| | 牧畜的 | 有趣的 | 観念的 | 心界的 | 物界的 | | | | |
| ～権（11語） | 会合権 | 家長権 | 護身権 | 絶対権 | 撰挙権 | 占領権 | 相対権 | 天与権 | 法与権 |
| | 無上権 | 名声権 | | | | | | | |
| ～法（11語） | 解析法 | 教会法 | 教解法 | 契合法 | 限嗣法 | 差違法 | 残余法 | 手語法 | 発見法 |
| | 伴差法 | 普通法 | | | | | | | |
| ～者（７語） | 継述者 | 語学者 | 守産者 | 祖述者 | 設法者 | 附従者 | 遺言者 | | |
| ～律（５語） | 自護律 | 宗教律 | 接近律 | 制定律 | 相対律 | | | | |
| ～論（４語） | 快楽論 | 教授論 | 道徳論 | 理外論 | | | | | |
| ～学（４語） | 社会学 | 諸芸学 | 植物学 | 絶智学 | | | | | |
| ～力（３語） | 親和力 | 附着力 | 與形力 | | | | | | |
| ～性（２語） | 擬似性 | 類似性 | | | | | | | |
| ～術（２語） | 占星術 | 錬金術 | | | | | | | |
| ～家（２語） | 立法家 | 歴史家 | | | | | | | |

これらの接尾辞は，「～家」を除けば，いずれも初版に現れたもので，初版当時の用法をそのまま受け継いでいるとみられる。このうち，「～権」と「～律」の用例が，初版の２語と３語に対して，再版では，それぞれ11語と５語に語数を増やしているのを除いて，特に注目に値するところがないようである。

ここに挙げたもののほかに，「～心・～教・～党」なども初版に現れた接尾辞であるが，再版の増補語では，「承讃心・印度教・社会党」と，それぞれ一例だけ見られる。

□＋□□パターンのもの

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 不～（23語） | 不畏天 | 不可疑 | 不関渉 | 不完全 | 不関属 | 不決断 | 不合規 | 不合宜 |
| | 不合時 | 不公正 | 不合法 | 不合理 | 不順当 | 不承当 | 不信者 | 不成熟 |
| | 不成全 | 不正当 | 不精密 | 不相合 | 不調和 | 不明白 | 不用意 | |
| 大～（５語） | 大教頭 | 大審院 | 大誓約 | 大頭領 | 大法官 | | | |
| 無～（２語） | 無定見 | 無偏私 | | | | | | |

初版と比較すれば，接頭辞のパターンがほとんど変わっていないことがわかる。

接尾辞または接頭辞としての用法がはっきりと意識される三字訳語を除外すると，残りの三字増補語（62語）は次の通りである。

安定度　為換券　一個人　一保主　委権状　海関税　廻審院　感応篇　勧業会　灌奠礼
翰林院　逆定規　救済会　教授書　契合識　言行録　元老院　国事犯　小作人　最終種
裁判所　三頭政　十因縁　十頭政　終身産　守護神　守護聖　受託人　順定規　召喚状

書記官　書記生　所有主　枢密院　成形質　制限産　専有産　全領産　相続人　代議士
嘆訴状　定住国　哲学史　天啓書　道徳経　答弁書　年代記　巴力門　判事長　鄙教民
復帰産　分界地　弁判識　保安官　保任状　没産分　野蛮人　傭奴分　養老金　履行国
立法部　劣等産

再版で増補された三字訳語の出自を考えると，当時の中国語から取り入れたものや，明治前期に造られたものが含まれているほか，増補者によって新造されたものも混じっているであろう。ただし，増補者によって新造された語の多くがその後廃語となり，現代語に残した形跡は比較的少なかったといわざるをえない。

### 3.2. 再版の四字訳語

再版で増補された四字訳語（82語）のなかで，接尾辞といえるものは，「～主義」「～者」「～的」くらいで，初版に見られる同類の用法を超えることはなかった。

～主義（９語）　禁欲主義　厳括主義　空想主義　好悪主義　神学主義　制欲主義
専制主義　保守主義　利用主義
～者（３語）　原子論者　絶智学者　東洋学者
～的（１語）　非仮形的

以上を除けば，ほとんどの四字語は，二字漢語が前語基と後語基になって，□□＋□□パターンで構成されているといってよい。初版の四字訳語に倣って整理すると，２語以上の出現率を有し，後接語基となる二字漢語は次の通りである。

―制裁（５語）　神定制裁　政治制裁　天理制裁　道義制裁　法律制裁
―体系（３語）　科学体系　哲学体系　法律体系
―哲学（３語）　演繹哲学　帰納哲学　東洋哲学
―政治（２語）　三頭政治　五頭政治
―感動（２語）　意識感動　神経感動
―義務（２語）　絶対義務　相対義務
―教育（２語）　強迫教育　自由教育
―結案（２語）　概括結案　特目結案
―混合（２語）　純一混合　雁雑混合
―転換（２語）　反面転換　有限転換
―動議（２語）　偶有動議　属従動議

このうち，「―哲学」と「―政治」の複合パターンはすでに初版に見られたものであるが，そのほかは再版で新たに現れたものとなる。なお，前接語基となる二字漢語はほとんどなく，しいていえば，「自然―」の「自然契合・自然発動」の２例だけである。

以上を除いて，再版で増補されたその他の四字訳語は40語ほど見られ，その主要なものは次の通りである。

移動協和　円満総念　改正条例　会同結社　家産返納　国勢平均　国立法教　裁判立法

産業協会　巡廻裁判　準権大典　人身保全　親族相姦　全権公使　村族社会　代表貨幣
抽象定義　重複命題　天賦権利　天律不変　藩属議院　藩属政府　比考推理　不容間位
優勝劣敗　理一分殊　両目同観　聯合家族

この中で，再版で初出したと考えられるものがむしろ少なく，たとえ増補者による造語があるとしても，そのほとんどが廃語となって現存していないと見られる。

### 3.3. 再版の五字以上の訳語

再版の増補語では，五字以上の訳語は全部合わせても25語で，全体の2.5%にすぎない。字数別でその全部を次に掲げる。

五字語（12語）

構成二重体　自然之公道　司簿裁判所　巡廻裁判所　正理之条規　僭称小名辞　僭称大名辞
専売特許状　嫡子家督法　破滅二重体　物件所在国　我思故我在

六字語（４語）

擬準流通証書　構成約結命題　破滅約結命題　万物合宜之理

七字語（５語）

據他説論事之法　契合差違合一法　自先天論来之法　不可以為不然的　由通識立論之法

九字以上語（４語）

不知他説而立論之法　據不確之説而立論之法　従公衆之説而論事之法　尚其所據而示其可尚之法

このうち，五字語と六字語の中にも，「～之～」のような句構成のものが見られるが，七字以上になると，もはや「訳語」ではなく，「句」や「文」による解釈というべきである。

また，五字以上の訳語で，現代日本語に受け継がれたものがほとんどないものの，「我思故我在」のように，20世紀にはいると，中国でも哲学用語として用いられ，日本語からの借用と思われるものもあるので，語源探しの資料としての利用価値がまったくないとはいえない。

## 4．三版改訂の特徴と研究の視点

『哲学字彙』（三版）は，『英独仏和哲学字彙』の略称である。初版(1881)と再版(1884)の間では，約３年の隔たりしかなかったのに対して，再版から三版(1911)の出版までは，28年の歳月が経ち，その間，哲学用語はかなりの進歩と定着を遂げていた。これには，主編者の井上哲次郎も気付いており，以前のものに改訂を加えるような三版よりも，事実上の新しい哲学用語辞典を編集したいと，この趣旨を三版の序文の中で述べている。たしかに，再版の改訂増補に比べて，三版では，本の組版形式が全面的に改められたと同時に，英語のほかに，ドイツ語・フランス語・ラテン語などの用語も取り入れられ，見出し語及び訳語の数は再版の数倍にまで拡大された。

三版の改訂状況については，永嶋大典(1970)に続き，飛田良文(1980)の論考があり，近時，また陳力衛(2001)の詳論が出ている。これらの先行研究によって，三版の様子が相当明らかになったが，ここでは，これらの論考を踏まえ，筆者なりに，三版の改訂における幾つかの側面をとりあげ，これに関する補完的資料を加えることとしたい。

三版の改訂は，その中味を詳しく見れば，主として，見出し原語と訳語の増加，小見出し語の増加，注脚付き語の増加及び哲学者人名の増加という四つの方面において，最も顕著に現れていると思われる。次に，この四つの視点から三版の改訂を検討していく。

## 5．三版における見出し語と訳語の増加

飛田良文(1980)では，初版・再版・三版の見出し語の語数比較表が掲げられている。この表によって，各版の見出し語の増加語数と増加倍率を算出することができる。

表３　初版・再版・三版における見出し語の増加語数と倍率

| | 初版語数 | 増加語数(倍率) | 再版語数 | 増加語数(倍率) | 三版語数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大見出し | 1562 | ＋635(0.41) | 2197 | ＋6002(2.73) | 8199 |
| 小見出し | 390 | ＋136(0.35) | 526 | ＋1694(3.22) | 2220 |
| 合　計 | 1952 | ＋771(0.39) | 2723 | ＋7696(2.83) | 10419 |

＊表中，三版の語数は「本文」部と「補遺」部の語を加算したものである。

つまり，初版から再版になった場合，見出し語の増加は４割ほどであるのに対して，再版から三版になった場合となれば，見出し語の増加は2.83倍という激増ぶりを見せている。小見出しの増加については，別項で検討することにし，ここでは，まず，大見出し（見出し語）のほうをとりあげてみよう。

### 5.1．ドイツ語見出しの語数と位置付け

三版における見出し語の増加は，英語の見出し語が数多く増やされたほか，ドイツ語をはじめ，他言語の見出し語の導入も，見出し語全体の急増をもたらした直接な原因の一つとなったに相違ない。他言語の見出し語といっても，ドイツ語のものがほとんどで，その他のものがほんのわずかしかなかった。筆者の調査によると，三版の中でドイツ語の見出し語は次のような位置付けになっている。

表４　三版におけるドイツ語見出しの位置付け

| | 全体の語数 | ドイツ語の語数 | ドイツ語の比率 |
|---|---|---|---|
| 「本文」部の見出し語で見た場合 | 6548 | 2036 | 31.1% |
| 「補遺」部の見出し語で見た場合 | 1651 | 1131 | 68.5% |
| 「本文＋補遺」全体で見た場合 | 8199 | 3167 | 38.6% |
| 増補見出し語のみで見た場合 | 6002 | 3167 | 52.8% |
| ４訳語以上の見出し語で見た場合 | 677 | 126 | 18.6% |

三版は「本文」部（pp.1-178）と「補遺」部（pp.179-205）からなっている。表４の結果によると，「本文＋補遺」全体の見出し語（大見出し）で見た場合，ドイツ語の見出し語（3167語）は全体の38.6%を占めている。つまり，三版では，英語の見出し語は６割余り，ドイツ語の見出し語は４割近くと，大きく二分しているのがわかる。また，ドイツ語の見出し語は，初版と再版にはまっ

たくなかったので，すべてが三版で増補されたものとなるが，三版増補語の範囲で見れば，ドイツ語見出しの比重はいっそう大きくなって，増補見出し語全体の半分以上（52.8%）を占めることになる。三版の改訂におけるドイツ語見出しの役割は予想以上に大きいものがあるように感じられる。

三版では，次の項で述べる，４訳語以上を持つ見出し語が相当多く見られるが，見出し語の訳語所有数でドイツ語見出しを見ると，表４に示したように，４訳語以上を持つ見出し語の中で，ドイツ語見出しの占める割合は18.6%となっている。これは，三版全体の見出し語で４割近くを占めるドイツ語見出しにしてみれば，相当低い数値といえよう。つまり，ドイツ語の見出し語は，術語ばかり集中したためか，３訳語以下という訳語所有数の少ないものが大半を占めることになっている。

### 5.2. 四訳語以上を持つ見出し語

各版における見出し語の増加は表３で示した通りであるが，しかし，訳語の増加については，語数が大量に及ぶためか，いまだに正確な数字が報告されたことはないようである。初版・再版の訳語と三版の訳語を比較対照してみると，一見出し語に３訳語以下が対応するケースならどの版でも共通に見られるが，しかし三版では，一見出し語に３訳語以上が対応するケースが著しく増えたことが目に付く。そこで，各版において４訳語以上を持つ見出し原語の語数を調査すると，次の通りになる。

表５　各版にある４訳語以上を持つ見出し語の語数と倍率

| | 初版語数 | 増加語数(倍率) | 再版語数 | 増加語数(倍率) | 三版語数 |
|---|---|---|---|---|---|
| ４訳語 | 40 | ＋25(0.63) | 65 | ＋229(3.52) | 294 |
| ５訳語 | 9 | ＋11(1.22) | 20 | ＋143(7.15) | 163 |
| ６訳語 | 1 | ＋8(8) | 9 | ＋65(7.22) | 74 |
| ７訳語 | 4 | ＋1(0.25) | 5 | ＋39(7.8) | 44 |
| ８訳語 | 0 | ＋1 | 1 | ＋38(38) | 39 |
| ９訳語 | 1 | ＋1(1) | 2 | ＋22(11) | 24 |
| 10語以上 | 0 | ＋0 | 0 | ＋39 | 39 |
| 合計 | 55 | ＋47(0.85) | 102 | ＋575(5.64) | 677 |

つまり，各版の４訳語以上を持つ見出し語の語数を比較すると，初版と再版の間では，平均して0.85倍の増加となっているのに比べて，再版と三版の間では，平均して5.63倍の増加に達している。また，訳語の所有数が多くなるにつれ，三版における見出し語の増加倍率がますます拡大していくことも，表５によって読み取れる。とりわけ，10訳語以上を持つ見出し語は，初版と再版になく，三版になってはじめて現れたものである。これらの語とその最初の訳語をあげると，次の通りである（「ド」はドイツ語の意，以下同）。

34訳語（１語）Investigation 究察

21訳語（２語）Clear 明晰，Distress 苦悩

20訳語（２語）Deep 深遠，Study 研究

19訳語（１語）Death 死

18訳語（１語）Licentiousness 驕肆

15訳語（３語）Contradiction 矛盾，Cruelty 残酷，Difficult 困難

14訳語（３語）Condition 制約，Deliberation 思慮，Imitation 擬似

13訳語（３語）Beginning 元始，Conclusion 結論，Vague 曖昧

12訳語（９語）Advice 勧解，Bildung（ド）形成，Clever 鋭敏，Conjecture 臆説
Disappointment 失望，Nature 物然，Stupidity 蠢愚，Understand 分暁，Weak 弱

11訳語（６語）Belief 信，Consideration 思慮，Difference 差違，Hypothesis 臆説，
Stolz（ド）矜高，System 系

10訳語（８語）Conceitedness 傲慢，Conduct 行為，Contemplation 熟考，Dummkopf（ド）愚人，
Mild 温和，Origin 起原，Plan 謀図，Regret 後悔

４訳語以上を持つ見出し語（677語）が所有するすべての訳語を合計すると，異なり語数で3804語になる。三版の全訳語の中でも大きな語彙集団を成しているが，その役割については，次の項で取り上げたい。

### 5.3. 類義漢語の訳語

さきに示した10以上の訳語を持つ見出し語の中から，いくつかの具体例をあげておこう（下線は漢籍の出典を持たず和製との可能性があるものを示す）。

Investigation（34訳語＝初版４語＋再版２語＋三版28語）

究察，稽査，尋繹，尋思，推明，探明，探賾，考覈，深究，討尋，尋究，<u>窮討</u>，窮探，推究，推求，<u>尋念</u>，穿鑿，詮索，検考，究極，索隠，窮幽，洞微，覃思，沈研，討尋（ママ），研尋，<u>攻究</u>，精麗，研究，審覈，<u>窮綜</u>，研覈，検覈

Licentiousness（18訳語＝再版４語＋三版14語）

驕肆，奢侈，侈靡，驕傲，淫靡，<u>華奢</u>，豪奢，侈華，<u>縦淫</u>，放蕩，浮浪，<u>軽嫖</u>，放肆，嫖慢，放縦，僭濫，<u>濫嫖</u>，戯慢

Contradiction（15訳語＝初版７語＋三版８語）

矛盾，背戻，背馳，<u>撞着</u>，乖角，乖戻，忤逆，<u>逆受</u>，抵触，抵捂，扞格，枘鑿，<u>自家撞着</u>，<u>自語相違</u>，<u>反言対</u>

Difficult（15訳語＝初版４語＋三版11語）

困難，艱深，晦渋，艱渋，梗渋，艱険，険渋，蹇渋，艱梗，<u>艱奥</u>，艱棘，難解，難説，
佶倔聱牙，<u>深艱</u>隠晦

Clever（12訳語＝初版３語＋三版９語）

鋭敏，<u>頴敏</u>，警敏，敏慧，怜悧，聡明，聡達，聡悟，聡頴，聡利，慧捷，<u>捷慧</u>

Conjecture（12訳語＝三版12語）

臆説，臆測，臆度，臆断，<u>忘臆</u>，<u>暗推</u>，推測，安排，揣摩臆測，牽強付会，牽合附属（ママ），

強附牽合

以上の用例でわかるように，多数に並んでいる訳語は，互いに類義語同士となる漢語である。これらの漢語の出自を調べると，その８～９割が古い漢籍に出典を持つものであることがわかる。これによって，主編者井上哲次郎のいわゆる漢語尊重の編集態度を指摘することができるものの，しかし，これほど多くの漢語類義語をどこから採って来たかについては，依然として不明のままである。これに関しては，当時出版された英華字典・英和辞典類の利用が考えられるほか，同一漢字が前字・後字として構成される出典ある漢語のグループが多く見られることから，主編者が初版の緒言で触れた『佩文韻府』(1711) のような中国の類書が，類義語の収集に使用されたとの可能性もあると，筆者は考えている。例えば，類義の漢語グループとは，次のようになっている。

Licentiousness の訳語の場合

侈→侈靡・侈華・奢侈　　奢→華奢・豪奢・奢侈　　放→放蕩・放肆・放縦

驕→驕肆・驕傲　　淫→淫靡・縦淫　　慢→嫖慢・戯慢　　濫→僭濫・濫嫖

Difficult の訳語の場合

艱→艱深・艱渋・艱険・艱梗・艱奥・艱棘　　渋→晦渋・梗渋・険渋・蹇渋

難→困難・難解・難説

ただし，多くの純正漢語の中にあって，編集者が自身の漢学の素養をいかし，下線をつけた語のような和製漢語を一部混入させていることも見逃せない。

編集者は，これほど多くの類義語を並べた理由についてまったく触れていないが，結果的に見て，『哲学字彙』が初版から持っていた，外国語を日本語に翻訳するときに用いる対訳辞書の性格は，三版の改訂によって大幅に強められたと認められる。しかし，類義漢語のような訳語は，専門語以外の一般語に限って多く付けられている傾向が強いため，結局，三版は初版・再版が果たしていた学術用語集の役割からはずれ，中途半端な対訳辞書に傾いたようにも思われる。そのうえ，増補された訳語には難しい漢語が多用されているため，現代語の立場から見れば，訳語の生存率がかなり低下しているのも避けられない事実である。

## ６．三版における小見出しの増加

『哲学字彙』では，初版のときから，一部の見出し語の下に複数の小見出しが置かれていることが見られる。そして，版を重ねるごとに，小見出しの数が徐々に増えていく場合がある。一例をあげると，

Conversion 転換（論），改宗（宗）

初版　Simple conversion 単転換，Accidental conversion 偶転換

再版　Simple conversion 単転換，Accidental conversion 偶転換，
　　Conversion of negation 反面転換

三版　Accidental conversion 偶転換，Conversion of negation 反面転換，
　　Contingent conversion 不虞転換，Simple conversion 単転換

のようである。小見出しの数については，本稿の表３で示したように，初版と再版の間でそれな

りに増えたが，三版になると，一躍して数倍という増加率を見せている。ここでは，飛田良文(1980)の統計を踏まえ，小見出しの数とは別に，小見出しを持つ見出し語のほうにも目を向けて，どんな見出し語がどのくらいの小見出しを持っているのか，あるいは，小見出しはどう分布しているのか，などの点について検討してみたい。

### 6.1. 小見出しを持つ見出し語の語数

小見出しの数は，これを持つ見出し語と関連付けてみると，一見出し語につき，1小見出しから数10小見出しまでさまざまである。まず，小見出しを持つ見出し語をリストアップして，次表のように，小見出し数別に整理しておく。

表6　各版にある小見出しを持つ見出し語の語数と倍率

| 小見出し数 | 初版語数 | 増加語数(倍率) | 再版語数 | 増加語数(倍率) | 三版語数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1小見出し | 29 | +36(1.24) | 65 | +232(3.57) | 297 |
| 2小見出し | 28 | +1(0.04) | 29 | +72(2.48) | 101 |
| 3小見出し | 11 | +10(0.91) | 21 | +42(2.0) | 63 |
| 4小見出し | 11 | +0(0) | 11 | +35(3.18) | 46 |
| 5小見出し | 4 | +3(0.75) | 7 | +17(2.43) | 24 |
| 6小見出し | 2 | −1(−0.5) | 1 | +16(16.0) | 17 |
| 7小見出し | 1 | −1(−1) | 0 | +11 | 11 |
| 8小見出し | 2 | +1(0.5) | 3 | +7(2.33) | 10 |
| 9小見出し | 2 | +1(0.5) | 3 | −1(−0.33) | 2 |
| 10小見出し | 2 | +0(0) | 2 | +2(1) | 4 |
| 10以上 | 7 | +3(0.43) | 10 | +33(3.3) | 43 |
| 合　計 | 99 | +53(0.54) | 152 | +466(3.07) | 618 |

表6を見ると，初版から再版を経て三版にいたるまで，小見出しの総数は増え続けているのがわかるが，わずかに減少した項目もあった。それは，先行版の小見出しを土台に，後続版で追加が行なわれ，もとの小見出しの数が変更したためである。例えば，「Force 勢力，元気」の場合，初版では7小見出しであったが，再版では1小見出しが加えられ，計8小見出しになったため，8小見出しの欄に登録するようになった。しかし，再版ではほかに7小見出しの語が現れなかったので，「−1」の結果になったわけである。

また，再版と三版の間では，次のように，再版にあった小見出しが三版で削除された例が一部見られる。

| 再　版 | (小見出し) | 三　版 |
|---|---|---|
| Issue 発貨，結案 | General issue 概括結案 | 削除 |
| | Special issue 特目結案 | 削除 |
| Negotiation 商議 | Negotiable paper 流通証書 | 削除 |
| | Quasi-negotiable 擬準流通証書 | 削除 |

| | | |
|---|---|---|
| Primitive 原本的 | Primitive man 原人 | 大見出しに変更 |
| Public 公衆 | Public spirit 公心，義気 | 削除 |
| Tariff 税則 | Custom tariff 海関税 | 削除 |

しかし，削除・変更された小見出しはごく少数にとどまっているので，各版の間では，基本的には，先行版の小見出しを取り入れたうえ，さらに新しい小見出しを加えていく形を取っているといえる。

### 6.2. 小見出しを持つ見出し語の性質

表６によると，再版では，小見出しを持つ見出し語は，初版に比べて，53語（0.54倍）ほど増加したのに対し，三版では，再版の3.07倍にあたる466語という大幅な増加が行なわれたことがわかる。『哲学字彙』の各版において，小見出しを持つ見出し語は，いったいどんな性質のものなのか。これを明らかにするために，表６に基づいて，三版にある５小見出し以上を持つ見出し語を抽出し，その主な訳語とともに，次の一覧表を作成した。

表７　三版にある５小見出し以上を持つ見出し語
＊表中の①は小見出し数，②は見出し語の語数を示す。小見出し数の多い順に従って左右に配列した。

| ① | ② | 見出し語と訳語 | ① | ② | 見出し語と訳語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 1 | Feeling 感情 | 48 | 1 | Form 形式 |
| 41 | 1 | Syllogism 推測式 | 39 | 1 | Term 名辞 |
| 38 | 2 | Law 法律，Psychology 心理学 | 32 | 1 | Social 社会的 |
| 31 | 1 | Gcfühl（ド）感情 | 29 | 1 | Necessity 必然 |
| 28 | 2 | Proposition 命題，Sensation 感覚 | 27 | 1 | Cause 原因 |
| 26 | 2 | Judgment 断定，Philosophy哲学 | 25 | 1 | Method 方法 |
| 20 | 2 | Religion 宗教，Wort（ド）語 | 19 | 1 | Knowledge 知識 |
| 18 | 2 | Principle 原理，Sense 感性 | 17 | 2 | Power 勢力，Zeit（ド）時間 |
| 16 | 3 | Logic 論理学，Right 権利，Unity 統一 | 15 | 2 | Ethics 倫理学，System 系統 |
| 14 | 3 | Selection 淘汰，Universal 全般，Wahn（ド）妄想 | 13 | 4 | Gesetz（ド）法律，Illusion 錯覚，Logical 論理的，Moral 道徳的 |
| 12 | 5 | Act 動作，Idealism 唯心論，Interest 趣味，Notion 総念，Quality 性質 | 11 | 4 | Cognition 認識，Realism 実在論，Sanction 制裁，Science 科学 |
| 10 | 4 | Education 教育，Irrefein（ド）精神病，Mental 心理的，Theology 神学 | 9 | 2 | Action 作用，Vorstellung（ド）表象 |
| 8 | 10 | Force 力，Matter 物質，Movement 運動，Possibility 可能性，School 学校，Thing 物，Trieb（ド）欲，Vision 観，Zweck（ド）目的，Sprache（ド）言語 | | | |
| 7 | 11 | Affect 感動，Apperception 統覚，Idea 観念，Morality 道徳，Nature 性質，Point 要点，Proximate 直接，Psychic 精神的，Synthesis 総合，Tone 調音，Truth 真理 | | | |
| 6 | 17 | Abstraction 抽象，Conception 概念，Consciousness 意識，Denken（ド）思惟，Emotion 情緒，Energy 勢用，Faculty 能力，Gedächtnis（ド）記憶，Ich（ド）自我，Materialism 唯物論，Monistic 一元的，Pantheism 萬有神教，Positive 正面，Synthetic 総合，Teleology 目的論，Variation 趨変，Will 意志 | | | |

| | | |
|---|---|---|
| 5 | 24 | Atom 原子，Being 実在，Bewußtsein（ド）意識，Blödsinn（ド）痴狂，Certainty 理証，Church 教会，Corporation 協会，Court 裁判所，Fallacy 虚偽，Formal 形式的，Hyperästhesie（ド）感覚過敏，Inference 推度法，Monism 一元論，Reaction 反応，Sentiment 情操，Soul 精神，Spot 点，Value 価値，Vernunft（ド）理性，Work 著作，World 世界，Zelle（ド）細胞，Self 自我，Urteil（ド）断定 |

紙幅の関係上，ここで小見出しの具体例をあげるのを省略するが，表７を見てもわかるように，５小見出し以上を持つ見出し語のほとんどは，哲学・論理学・心理学・倫理学，または法律などの各分野に用いられる基本的な術語となっている。中には，一見して一般語のように思われる見出し語でも，実際に小見出しのほうを見れば，ほとんど術語的な語句が並んでいるのがわかる。例えば，

Force 力（８小見出し）

Impulsive force 衝動力，Incident force 偶有力，Nerve force 神経力，

persistence of force 勢力耐持，Physical force 物質力，…

Interest 趣味（12小見出し）

Aesthetic interest 美的趣味，Empirical interest 経験的趣味，Social interest 社会的趣味，

Practical interest 実際的趣味，…

Thing 物（８小見出し）

Compound things 合成物(法)，Divisible things 可分物(法)，Intellectual things 無体物(法)，

Simple things 単純物(法)，…

のようである。５小見出し以上を持つ見出し語について述べてきたことを，５小見出し以下を持つ見出し語まで拡大してみても，ほぼ変わらない結論が得られると思われる。これで，小見出しを持つ見出し語，および小見出しのほとんどは，各分野の術語であることが明らかになった。

三版の訳語の性質を考える立場から見れば，小見出しを持つ見出し語および小見出しの急増は，5.3で述べた，訳語の増加で見られる類義漢語の多用とは，まるで正反対のような訳語の増やし方で，一種の張り合い関係を成しているといえよう。類義漢語のような訳語は，一般語の部類に属し，三版の専門語辞書としての性質を弱めているのに対して，小見出しを持つ見出し語および小見出しは，術語が主流で，三版の専門語辞書としての性質を強める役割を果たしている。

## ７．三版における注脚付き語の増加

『哲学字彙』では，初版・再版から三版にわたって，例えば，

Absolute　絶対（按，絶対孤立自得之義，対又作待，義同，絶待之字，出于法華玄義。）
　　純全，専制（政）

のように，一部の訳語に漢文注記が見られることが早くから研究者に注目されている。中でも，永嶋大典(1970)，飛田良文(1979)と陳力衛(2001)三氏の論考がとくに詳しく，本稿もその成果に負うところが大きい[6]。『哲学字彙』各版のうち，とくに三版では，漢文注記の付いた訳語，つまり注脚付き語の増加が目立っているので，ここで，初・再版と関連付けながら，その増加の様子について整理しておきたい。

注脚付き語の数え方については，研究者によって若干のずれが見られる。例えば，陳力衛(2001)では，人名などについている注釈や，単純な語義の注釈を除いて，「なるべく訳語の出典，つまり漢籍や仏典に出典を求めた語を取り上げたい」としている。永嶋大典(1970)が各版を通して抽出した80語も，陳氏の方針とほぼ同じだと見受けられる。筆者としては，脚注全体の性質を把握したいという考えに基づき，脚注の内容ではなく，その形式を重んじて，主として各版に見られる「按」の字で始まる注脚を全部抽出することにした。その結果は表８で示した通りである[7]。

表８　各版にある注脚付き語の語数と分布

| 注脚付き語のパターン | パターン別語数 | 初版の語数 | 再版の語数 | 三版の語数 |
|---|---|---|---|---|
| （1）初・再・三版共にあり | 44 | ○ | ○ | ○ |
| （2）初・再版あり三版削除 | 19 | ○ | ○ | × |
| （3）初版なし再・三版あり | 2 | × | ○ | ○ |
| （4）初・再版なし三版あり | 61 | × | × | ○ |
| 合　計 | 126 | 63 | 65 | 107 |

表８によって，各版における注脚付き語のパターンと分布がわかる。（1）～（4）の各パターンについて，次の各項で検討してみよう。

### 7.1. 各版を通して注脚が見られるもの

表８のうち，(1) の各版を通して注脚が見られるものは次の44語である（下線は，出典ではなく，編者の注釈を添えた語を示す)。

Absolute 絶対，Abstract 形而上，Acosmism 無宇宙論，A priori 先天，Aretology 達徳論，Becoming 転化，Beginning 太初，Category 範疇，Change 萬化，Coexistence 俱有，Concentration 凝聚，Concrete 形而下，Deduction 演繹法，Docetism 度屑得教，Ebionitism 以彼阿尼教，Existence 萬有成立，Gnosticism 諾斯士教，Gymnosophist 赤脚仙，Heterogeneity 雁雑，Homogeneity 純一，Idealism 唯心論，Induction 帰納，Intelligence 虚霊，Magianism 邁実教，Materialism 唯物論，Metaphysics 形而上学，Naturalism 自然論，Human nature 性，Necessitarianism 必然論，Nirvana 涅槃，One 泰一，Reality 真如，Relativity 相対性，Revolution 革命，Rosicrucians 錬金方士，Rudiment 元形，Sage 至人，Samadhi 三昧，Substance 大極，Trinity 三位一体，Unconditioned 無碍的，Unification 冥合，Vanity 盗夸，Infinite vision 無限観

このうち，たとえば，

Docetism　度設得教（初版)→度説度教（再版)→度屑得教（三版）

Naturalism　唯理論（初・再版)→自然論（三版）

Relativity　相対（初・再版)→相対性（三版）

のように，初・再版と三版の間で訳語が変化したものが二三見られるが，原語と注脚の内容が変わっていないので，同様に扱った。これらの注脚をながめると，性質の異なるものが並存していることに気付く。

まず，この中で，古い漢籍の出典または根拠を示したものが大半を占めているものの，下線を引いた訳語（８語）のように，漢籍の出典などと関係なく，単なる編者のコメントや注釈を添えただけのものも混じっている。たとえば，

無宇宙論（按，斯比諾薩以為世界非在絶対以外者也，是為無宇宙論。）

以彼阿尼教（按，基督教之一派。）

赤脚仙（按，昔者印度有一種之学派，裸体而漫遊，故時人呼曰赤脚仙，蓋是仏家所謂裸形外道。）

唯物論（按，物一而已，以其流行而言，謂之気，以其凝聚而言，謂之体，以其妙用而言，謂之心，以其変化而言，謂之光，謂之熱，謂之鑑，謂之電，其他凡在覆載間者，無一不自物而生，此唯物論所以縁起也。）

三位一体（按，基督教徒中，有以天父神子聖霊為三位一体者，天道遡原，固一而三，三而一者也。）

のようである。これらの注脚は，難解な訳語に付けられていると考えるならば，ほかにも難解な訳語がたくさんある中，これらの語だけが選ばれた理由は明らかではない。

次に，漢籍の出典などを示した注脚の中では，訳語の出典を漢籍に求めたものと訳語の根拠を漢籍に求めたものとの違いがあるのに注目すべきである。出典を漢籍に求めたものとは，例えば，

転化（按，淮南子原道訓，転化推移，得一之道，以少生多。）

形而下（按，易繫辞，形而下者，謂之器。）

のように，訳語の語形がそのまま注脚に現れている場合をいうが，中には，

帰納（按，帰還也，納内也，韻書，以佐結字故云帰納，今仮其字而不取其義。）

のように，語形だけ借りて，原語の意味を取らないと明言する例もわずかに見られる。根拠を漢籍に求めるものとは，例えば，

範疇（按，書洪範，天乃錫禹洪疇九疇，彝倫攸叙，範法也範類也。）

厖雑（按，厖雑也，書周官，不和政厖，厖一作龐。）

のように，訳語を構成する漢字が見られるものの，語形はそのまま注脚に現れていない場合である。ちなみに，

達徳論（按，中庸，智仁勇三者，天下達徳也，注謂之達徳者，天下古今所得之理也。）

演繹法（按，中庸序，更互演繹，作為此書。）

萬有成立（按，現象之外，別有広大無辺不可得而知者，謂之萬有成立，成立之字，出于李密陳情表。）

のように，訳語の一部が注脚に見られるが，「～論」「～法」など注脚には現れない部分がある例も，根拠を漢籍に求めた訳語に準じて考えられよう。

また，漢籍の出典または根拠を示した注脚付き語を見ると，「絶対，先天，転化，範疇，演繹法，帰納，唯心論，唯物論，形而上学，相対性，革命」などのように，明治前期に訳出された重要な哲学概念については，漢語尊重の当時にあって，その出典または根拠を漢籍に求めるのがわかるが，一方，「太初，萬化，俱有，泰一，真如，無碍的」などのように，それほど重要な概念とは思えないのに，これにも漢文注記が付いている。すると，漢文注記は訳語の重要度を吟味して付け

られたものというよりも，編者には注記内容の用意があるかないかで，つまり，ある程度の恣意性を持って付けられたものではないかとの印象を与えざるを得ない。陳力衛氏は，井上哲次郎の手稿に見られた注脚付き語を検討し，その性質について「一方では訳語に確たる証拠を与えてその正統性を主張しようとした。もう一方では単に読書メモをとるついでに，漢籍から新しく発見した例文を示すことで自分の博学ぶりを披露しようとしたのではないか」と述べている[8]。筆者もこの考えに同感である。

### 7.2. 初・再版にあり三版で削除されたもの

表８の（２）に属するものを見ると，三つのパターンに分けられる。まずは，三版で見出し原語そのものが削除されたので注脚が削除された場合である（３語）。

Afflux 朝宗，Conflux 会同，Egoistic altruism 兼愛主義

次は，三版でもとの訳語が削除されたので，それに付されていた注脚が削除された場合である（８語）。矢印で示したように，初・再版の訳語が三版でほかの訳語に変更された。

Ambiguous 滑疑→汎意的，Complex 錯繆→複雑・錯雑，Deontology 達道論→本務論・義務論，Evolution 化醇→進化・発達，Mahayana 摩訶教→大乗，Modification 化裁→変形・変成，Perfectionism 全成教→完成教，Suggestion 張本→暗示・提起など

最後は，原語と訳語はそのまま，三版で注脚だけが削除された場合である（８語）。

Agnosticism 不可思議論，Deism 自然神教，Emancipation 解脱，Ethics 倫理学，Metempsychosis 輪廻，Seclusion 沈冥，Supernaturalism 超理論，Transubstantiation 化体

原語または訳語の削除に伴って，それに付されている注脚も削除されたという場合は理由が分かりやすいが，訳語がそのまま残っているのに注脚だけが削除された８語については，編者自身が触れていない以上，推測に頼るしかない。例えば，永嶋大典氏は「〈解脱〉〈輪廻〉はすでに古くから日本語の語彙にとけ込んでいるので，いまさら注記の必要もないと判断されたのかもしれない」としている[9]。ほかの語についていえば，「不可思議論」「自然神教」「超理論」「化体」の注脚は，漢籍の出典や根拠ではなく，編者の解釈である。しかし，これは注脚が削除された理由として考えるなら，残りの「倫理学」と「沈冥」は，出典の注脚なのに削除された例となる。

### 7.3. 再版で増補された注脚付き語

表８の（３）は，つまり再版で増補された注脚付き語ということになるが，増補者の有賀長雄によって加えられた注脚は，「Asceticism 厳括主義」と「Obscurantism 絶智学」の２語だけである。各版にある２語の記述は次の通りである。

Asceticism

初版　厳粛教

再版　厳粛教，制欲主義，厳括主義（按，揚子修身篇，其為外也，厳括則可以褆身。）

三版　禁欲主義，粛括主義（按，揚子修身篇，其為外也，粛括則可以褆身。）

Obscurantism

初版　　なし

再版・三版　　絶智学（按，老子，絶望棄智，民利百倍。）

「Obscurantism 絶智学」については，再版で増補され，三版にそのまま受け継がれていったので，とくに問題がない。一方，「Asceticism 厳括主義」のほうを見ると，初版では，訳語は「厳粛教」の１語だけであったが，再版では，増補者の有賀長雄によって「制欲主義」と「厳括主義」の２語と注脚が加えられた。「制欲主義」と「厳括主義」は，おそらく有賀長雄の造語であろうと推察される。三版になると，井上哲次郎は「厳粛教」を削除したと同時に，「制欲主義」を「禁欲主義」に，「厳括主義」を「粛括主義」にそれぞれ改めた。

「厳括主義」を「粛括主義」に改めた直接的な理由は，井上が再版の注脚にあった「厳括」を三版の「粛括」に直したためである。そこで，『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社，1994）によって調べると，「厳括」という語が見当たらないが，「粛括」は収録されていて，そこには『哲学字彙』と同じ漢代の揚雄『法言・修身』の用例が載っているのがわかる。つまり，井上は，漢籍を引用した有賀の誤りを訂正したのである。なお，「制欲主義」を「禁欲主義」に改めた理由は明らかでないが，上述の『漢語大詞典』には「制欲」がなく，「禁欲」だけが収録されているのも確認した。ここからも，なるべく出典のある由緒正しい漢語を使おうとする井上の編集態度がうかがうことができる。

### 7.4. 三版のみ注脚が見られるもの

表８によると，三版では，注脚付き語の総数が再版の65語に比べ，42語ほど増加して107語となっていることがわかる。この中から，（２）項の削除された19語を差し引いて加算すると，（４）の三版で新しく現れた注脚付き語は61語となる。注脚の性質によって類別すると，次のような三つのパターンにまとめることができる。

まず，三版独自の注脚の中で最も多く，全体の半数ほどを占めるのは，訳語の出典を漢籍に求めたものである。例えば，

教育（按，教育之字，始出于孟子盡心上，育又作毓，音義並同。）

法律（按，淮南子主術訓，事不法律中在，而可以便国佐治。）

社会（按，近思録巻九，二程全書巻廿九云，郷民為社会，為立科条，…。）

などがその例であるが，次にこの種の全32語を掲げておく（下線は初・再版に注脚がなく，三版で新たに注脚が付けられた語を示す）。

Abstinence 遠離，Agent <u>作因</u>，Befangenheit（ド）結使，Blindly 盲冥的，Chaos 混茫・渾淪，Civilization <u>開化・文明</u>，Clear 明晰，Common sense <u>常識</u>，Conscience <u>本心・道心・道念・真心</u>，Consciousness <u>意識</u>，Creator 造物者，Education <u>教育</u>，Ego <u>自我</u>，Hallucination 迷罔，Ichheit（ド）我所，Illusion 迷妄，Law <u>法律</u>，Leistung（ド）成遂，Nation <u>国民</u>，Necessity <u>必然</u>，Perception <u>知覚</u>，Principle <u>主義</u>，Proof 符験，Propriety 的当，Right <u>権利</u>，Sehnsucht（ド）飢虚，Society <u>社会</u>，Transcendent 向上，Understand 分暁，Verkehrtheit（ド）倒錯，Vorurteil（ド）成心，Will <u>意思</u>

この中で，「常識」のように，和書の出典を引いたものが僅かながら存在するのを見逃してはならない。

常識（按，常識之字，出于語孟字義。）

「按」の中の『語孟字義』は，漢籍ではなく，伊藤仁斎(1627-1705)が論語と孟子の二書から選んだ語句を解説したもので，その中で「常識」という語が使われたとのことである[10]。

また，訳語の出典を漢籍に求めたのではなく，訳語の根拠を漢籍によって示したものは，三版独自の注脚付き語の中で６例ほど見られる。

経済学・理財学（文中子云，是其宗侍，七世矣，皆有経済之真。易繫辞云，理財正辞。）

宇宙（按，淮南子斉俗訓，往古来今，謂之宙，四方上下，謂之宇，又見于尸子。）

Docendo discismus 教人所以自学，Heimweh（ド）土思病，Motive 動機，Political economy 経済学・理財学，Universe 宇宙，Volition 執意

訳語の出典または根拠を漢籍に求めた注脚の中では，特に下線を引いた諸語に注目したい。これらの訳語は，いずれも初版と再版の時から見られたが，しかし当時は注脚が付いておらず，三版になってはじめて注脚が付くようになったものである。なぜ三版になって注脚が付けられたのか。これらの訳語を見ればわかるように，そのほとんどが明治初期に出現し，その後定着した基本概念語の類である。訳語の定着が先にあって，その出自を後から追加するというやり方の意味を考えると，やはり，漢籍の出典を明示することによって，これらの訳語の「由緒正しさ」を裏付けようとする編者の意図が見えてくるのかもしれない。ちなみに，上掲した訳語の中で，漢籍の出典を示しながらも，古典語の用法と区別し，語義の変化を示唆したような編者の説明が付け加えてあるものも二三見られる。

動機（列子天瑞篇云，万物皆出於機，皆入於機，注，機者群有始動之所宗云云，今取其字而不取其義。）

主義（按，汲冢周書謚法解，主義行徳，曰元，主義謂口義為主，今曰主義者，主要之義。）

権利（荀子勧学篇，…是故権利不能傾也，云々。万国公法，始仮用此字。）

最後に，漢籍の出典や根拠と関係なく，編者自身のコメントや注釈を内容とする注脚であるが，この種に属するものが比較的多く，23語ほど見られる。これを，さらに次の①～④項に類別することができる。

①漢語の術語（４語）

Aesthetics 美学（按，旧云審美学非。）

Anachromatic（ド）温色感性（按，紅黄褐，謂之温色。）

Archebiosis 原生（按，謂生物自生物而生也。）

Philosophy 哲学（按，西周訳利学説曰，哲学即欧州儒学也，今訳哲学，所以別之於東方儒学也。）

②音訳の術語（８語）

Academy 亜加的密園（按，園名，哲学者普拉頓曾教子弟処。）

Barbara 抜爾抜剌（按，論理之記号。）

その他　Amen 亜孟，Baralipton 巴剌利布頓式，Baroko 抜羅格式，Cabal 加抜剌，

Charvaka 斫婆迦，Upanishad 優波尼沙土

③漢字の説明（4語）

Colony 殖民（按，殖本作植，俗誤作殖，慣用已久，故不能改。）

Benefit 裨益（按，裨作稗非。）

Ecstasy 恍憬（按，恍又作怳慌。）

Stimulant 刺激（按，用刺戟之字非。）

④哲学者の人名（7語）

Aristokles 亜利斯特克列私（按，普拉徳之名。）

その他　Adramelech 亜土剌米列希，Chang-hung-chu 張横渠，Chang- i-chwan 程伊川，Chang-ming-tan 程明道，Cheu-tsz 周子，Chu-tsz 朱子

このうち，「Aesthetics 美学」「Philosophy 哲学」「Ecstasy 恍憬」の3語の原語を除けば，残りの20語は，すべて原語も訳語も三版で新たに増補されたものである。とくに，②③④項で示した解釈のパターンそのものは初版と再版にまったく見られなかったといえる。

原語が初版からあった3語については，「哲学」という語は，明治初年に造られ，西周の自著や初版を通じてすでに定着したものなので，三版の注脚は，あるいは「哲学」の出自を追認するような役割を果たしていると思われる。

「美学」という語は，初版と再版で「美妙学」と訳されていた。これは，西周が明治3～6年に書かれた哲学関係のノートにすでに見られた訳語で，そのまま初版に受け継がれたと見られる。しかし当時の社会では，「審美学」の勢力が「美妙学」を圧して強かったためか，三版の注脚において，「美妙学」に触れずに，「旧云審美学非」として，「審美学」を「美学」に改めたことに言及している。しかし，「美学」は三版になってはじめて使われだした用語かどうかについては，調査なしで断言できない。

Ecstasy の訳語は，初版と再版では「消魂・奪魄・大悦」となっていたが，三版ではもとの3語が削除され，「恍憬」に改められた。しかし，「恍憬」は『漢語大詞典』にも『大漢和辞典』にも収録されておらず，典拠不明なものか，それとも「恍惚」の誤りか，のどちらかになりそうである。

## 8．三版における哲学者人名の増加

初版と再版では，例えば「達維尼学派・韓図学派」のように，学派名の一部として哲学者の人名が出てくるが，人名だけが見出し語になることはまったくなかった。この意味で，三版における哲学者人名の項目は，増加というよりも新設といったほうが正しい。哲学者人名の項目はほとんど次のような形で収録されている。

**Bacon,** Francis. b.1561 ; d.1626. English philosopher. 倍根

**Banzan,** Kumazawa. Japanese economist and philosopher. b.1619 ; d.1691. 熊沢蕃山

**Socrates** A Creek philosopher. b.469 ; d.399 B. C. 瑣格剌底斯

**Zeno of Elea.** Greek philosopher. Lived in the 5th century B. C. 惹諾

語釈中のｂとｄは，それぞれ born（生）と death（死）の略称である。筆者の調べでは，三版にはこのような哲学者人名の見出しが89項目ほど見られ，西洋哲学者だけでなく，東洋哲学者の項目も含まれている。収録された人名を国別で分けると，次のようになる。

ギリシア（21人）　ドイツ（20人）　イギリス（11人）　フランス（10人）

中国（９人）　日本（５人）　イタリア（４人）　スイス（３人）　インド（２人）

アラビア／オランダ／スウェーデン／スコットランド（各１人）

哲学者の取捨選択については，編集者の言及がなく，明らかでないが，陳力衛(2001)が指摘したように，おそらく編集者の研究上の関心と関係するであろう。たとえば，日本の哲学者では，山崎闇斎(1618-82)，熊沢蕃山(1619-91)，物徂徠(1666-1728)，大塩中斎(1794-1837)，平田篤胤(1776-1843)の５人が収録されているが，いずれも江戸時代の朱子学・陽明学または神道を研究した人である。また，中国の哲学者９人のうち，紀元前に生きた老子，孔子，荘子，孟子らについては，いずれも，

**Lao Tsze.** Chinese philosopher, lived in the 6.century, B.C. 老子

**Confucius.** Chinese philosopher. b.551; d.479,B.C. 孔子

のように，英語による簡単な紹介だけで済んでいるのに対し，張載・程頤・程顥・周惇実・朱熹ら宋代の朱子学者については，

**Chang-hung-chu.** Chinese philosopher. b.1019 ; d.1077. 張横渠（按，張横渠，名載，字子厚，横渠其号也，所著有正蒙。）

**Chu-tsz.** Chinese philosopher and polyhistor. b.1130 ; d.1200.朱子（按，朱子名熹，字元晦，一字仲晦，号晦庵，所著有三十余種。）

のように，英語のほかに，注脚の「按」が付いていて，より詳しく紹介されている。ここからは確かに編集者の関心の所在が窺える。

もう一つは，三版にある西洋哲学者の人名はみな漢字を使って音訳されている点である。漢字による人名の音訳は，すでに初版刊行の明治10年代のときからも，平仮名・片仮名による人名の音訳と平行して行われていた。しかしその後，「韓図・倍根」など訳し方が早期に定着した少数の有名な哲学者を除いて，むしろ仮名による人名の音訳のほうが徐々に主流を占めるようになっていき，漢字訳の人名が廃れつつあった。こうみると，明治末期にあって，あえて漢字訳の人名を三版に取り入れたのは，時流に逆らったようなやり方だと思われる。事実上，三版の出版後，これらの漢字訳の人名に従ったものはほとんど現れなかったといえよう。

## ９．再版と三版の訳語の性質について

以上，『哲学字彙』の再版については増補訳語の字数別で，三版については収録語の急増をもたらした四つの側面から，それぞれ検討してきた。問題点はまだあれこれと残っているが，ここでは，次の諸点にまとめておきたい。

（１）再版の増補訳語は1022語で，再版全訳語の約３割（29.5%）にあたる。このうち，見出し語の増加による訳語の増補は83.8%を占め，訳語の追加による訳語の増補は16.2%となっている。

増補訳語の中で，二字訳語は圧倒的に多く，増補語全体の72.3%を占めているが，つづいて，三字訳語（15.6%）と四字訳語（8.0%）は，大差を付けられて，二位と三位になっている。

二字訳語の中で，筆者にとって最も関心のあるものは，中日の現代語でともに現存するC類語とD類語である。C類語については，いちおう古い漢籍に典拠を持つのを確認したが，今後，訳語となったのがきっかけで新義への転用があるかどうかをさらに検討していく余地が残っていると思う。一方，D類語については，C類語に反して，古い漢籍に典拠を持たない近代以後の新語であるのを確認したものの，再版の新造語かどうかなど，その出自を判明するまでにはまだ至っていない。また，二字訳語のほか，術語が主流となる三字訳語と四字訳語の中で，とくに現代語に受け継がれた少数のものに留意する必要がある。術語の語源探し資料としての利用価値がありうるからである。

（2）再版の増補者有賀長雄は，明治15年東京大学の哲学科を卒業した人であるが，彼の明治前期の著訳書『訳解近世哲学』（明治17-18）や『聖門哲学論』（明治19）などを見ると，西洋哲学史に傾いていて，哲学用語の使用はそれほど多くなかった。また，明治後期の『論理学講義』（明治31）をとってみても，当時の主流に従わない自己流の造語が多く，哲学用語の形成にあまり貢献していない感がある。『哲学字彙』再版の改訂も，再版の緒言に述べられているように，積極的な発案によるものではなく，初版刊行の２年後に「印本全尽」となり，再版刊行のために改訂の運びとなった。そして，ちょうどその時，共編者たちはみな海外にいるので，「故至改訂印刷之業，長雄専任其責」ということになったのである。改訂の作業を半ば受身的に引き受けた有賀にとって，「正誤謬，補不足」を全うするだけで精一杯であったのかもしれない。

（3）三版訳語の性質を明らかにしようとして，本稿では，初版・再版における訳語の増補を顧みながら，三版の訳語急増をもたらした幾つかの側面を検討した。その要点を次表のように整理することができる。「訳語の役割」の欄では，それぞれの改訂項目間に見られる訳語の張り合い関係をとらえてみた。

表９　三版訳語の性質についてのまとめ

| 改訂の内容 | 訳語の性質 | 訳語の役割 |
|---|---|---|
| ドイツ語見出しの導入 | 各分野の術語。三版見出し語全体の38.6%，増補見出し語の52.8%を占めている。 | 『哲学字彙』の専門対訳辞書の性質を強める。 |
| 小見出しを持つ見出し語 | 術語のなかでも基本度の高いものが多い。この618語が中心に構成される2220の小見出しも各分野の術語である。 | |
| ４訳語以上を持つ見出し語 | 術語以外の一般語が多い。大小さまざまの類義漢語のグループを成していて，所有訳語数は3804語に及ぶ。 | 『哲学字彙』の一般対訳辞書の性質を強める。 |
| 注脚付き語の増加 | 訳語の出典または根拠を漢籍に求めたもの（約７割）と編者自身の解釈を添えたもの（約３割）との二種類がある。 | |
| 哲学者人名見出しの新設 | 初版と再版になく，三版で新出。計89項目のうち，東洋人に関しては，朱子学研究者が中心となる。 | |

（4）三版訳語の全体像が本稿で明らかになったわけではない。三版で大量な訳語が増加されたので，中には，再版の後に生まれた新出の術語なども多く含まれているはずである。しかし，必ずしも三版を通してこれらの新語を整理・検討する必要があるとは限らない。なぜなら，三版を

取り巻く明治末期の哲学界の状況は，初版と再版刊行の当時と比べれば，大きく変化したからである。

哲学用語辞典に限っていえば，たとえば，再版に一年ほど遅れて出版された『教育・心理・論理術語詳解』(1885) では，収録語数が490語と少なめであるが，見出し語は日本語で，しかも，すべての見出し語について詳細な解釈を施している。「推測式」という語を例にとれば，

推測式〔シロジスム〕 推測式ハ其ノ淵源遠ク希臘ノ古代ニアリテ論理学上最緊要ナル者トス，此ノ法ハ三段論法トモ称ス可キ者ニシテ…

のように，200字以上の語釈が書かれてある。また，三版の刊行に先立って1905年に出版した朝永三十郎著『哲学辞典』と徳谷豊之助ら合著『普通術語辞彙』，並びに三版と同年に出版した同文館『哲学大辞書』(1912) は，みな内容のすぐれた力作であった。したがって，明治末期における『哲学字彙』三版の位置付けといえば，単なる外国の哲学書を翻訳するときに便利な対訳辞典に過ぎなかったのかもしれない。ちなみに，三版の編集者である井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造は，三人とも同文館『哲学大辞書』の編集担当者を兼ねていることから考えると，『哲学大辞書』の編集と『哲学字彙』三版の改訂との関係が興味ある問題となるし，少なくとも，三版には『哲学大辞書』を超えて多くの新語が収録されている可能性は低いと思われる。

## 注

1　飛田良文(1980)では，例えば，初版にあって再版で削除したもの，または再版で訳語を変更したものなどの例もあげられている。本稿では，再版で削除したものの数はごく少数にとどまっているので，とりあげないことにした。また，再版で訳語を変更したものは増補訳語として扱った。なお，真田治子(2001)でも，再版の訳語変動にふれ，各パターンの語数を提示しているので，参照されたい。

2　注１を参照。この表１も，初版の訳語を削除・変更した少数の例を捨象し，再版の増補状況を単純化した上で作成したものである。

3　朱京偉(1997)の２の（１）を参照。

4　代表的な国語辞典として，中国語では『現代漢語詞典』(商務印書館，1978)を，日本語では『新潮現代国語辞典』(新潮社，1985)を，それぞれ選定した。前者は収録語約５万６千語，中国では中型辞典に分類される。後者は収録語約７万７千語，日本では小型辞典の部類にはいる。単なる辞典の収録状況によって死語かどうかを判定するには躊躇があるが，なるべく主観的判断を避けるという考えから，さしあたり判定の基準を辞典の収録語に置いた。

なお，本稿では「死語」と「廃語」の二語をともに用いているが，表２で示したように，漢籍に出典を持つものについては「死語」と呼び，漢籍に出典を持たないものについては「廃語」と呼んで区別したためである。

5　再版の増補語に見られる一字訳語は次の16語である。

意　毅　卿　郡　卦　言　辜　罪　士　体　道　風　理　例　代　注

いずれも上位概念を表す一般語となっていて，術語ではないので，本稿でとりあげないことにした。

6　永嶋大典 (1970) の第５章pp.105-112，飛田良文(1979)のpp.227-228，及び陳力衛(2001)の第四章第三節pp.309-322を参照。

7　三版では，「按」の字が付いていない注脚も二三見られるが，これもほかの注脚と同様に扱った。飛田良文(1979)では，初版の注脚付き語を63語としているが「Necessitarianism 必至論」の一語は見落とされたようである。また，陳力衛(2001)では，三版で削除された注脚付き語を18語掲げているが，小論では「Ambiguous 滑疑」と「Egoistic altruism 兼愛主義」の２語を加えておいた。

8　陳力衛(2001)p.321を参照。

9　永嶋大典(1970)p.109を参照。

10　飛田良文(2000)を参照。

## 参考文献


永嶋 大典（1970）『蘭和・英和辞書発達史』講談社

飛田 良文（1979）「『哲学字彙』について」『哲学字彙　訳語総索引』笠間書院

飛田 良文（1980）「『哲学字彙』の成立と改訂について」，名著普及会覆刻本『英独仏和哲学字彙』所収

朱 京偉（1997）「『哲学字彙』（初版）の訳語とその性質」『名古屋商科大学論集』第41巻第２号

飛田 良文（2000）「常識は幸せを招くか」，淡交社編『なごみ・月刊』7月号

陳 力衛（2001）「『哲学字彙』における訳語の成立――著者の自筆稿本による第三版の改定・増補を中心に」『和製漢語の形成とその展開』汲古書院

真田 治子（2001）「『哲学字彙』改版にあたっての訳語の変動」，都留文科大学『国文学論考』第37号



（投稿受理日：2001年７月25日）


---


朱　京偉（しゅ　きょうい）

北京外国語大学日語系

100089 中国北京市西三環北路２号

zhujingwei@fm365.com

*Japanese Linguistics* 10 (October, 2001) 80-106 [Article]

# Newly adopted words in the 2nd and 3rd versions of *"Tetsugaku-jii"*

ZHU Jingwei
Beijing Foreign Studies University

**Keywords**

history of vocabulary, technical terms, terms in philosophy, Tetsugaku-jii, translated words

**Abstract**

This paper clarifies the features of translated terms used in the 1st, 2nd and 3rd versions of Tetsugaku-jii (Vocabulary of Philosophy). After research on the 1st version in 1997, the author made an inquiry into the 2nd and 3rd versions. The main points of the present study are number of new words in the 2nd version and four items which made the 3rd version extremely large, namely, entries and their equivalent terms in translation, subentries, footnotes and the names of philosophers.

Among the new words in the 2nd version we should take note of C and D types, which are still alive both in contemporary Chinese and Japanese. Some surviving 3 and 4 character words are also worthy of note. The 3rd version was enlarged drastically because the dictionary adopted not only technical terms but words of common people. Tetsugaku-jii has changed its character. The 1st version was an advanced glossary for specialists, but the 3rd version, published at the end of Meiji era, was considered a sort of ordinary bilingual dictionary.